写真１　主体部検出状況（南西から）

写真２　天井石検出状況（南西から）

写真３　天井石接写

写真４　天井石検出状況（北西から）

写真５　側石検出状況（北東から）

写真６　天井石検出状況（北西から）

写真７　No.１トレンチ
硬化面検出状況（北東から）

写真８　No.１トレンチ土層堆積状況（南壁）

写真９
No.１トレンチ完掘状況

〇調査成果

・平成２８年度に実施した地中レーダー探査の結果通り、後円部に箱式石棺が検出した。

・検出した石棺の規模は、長さ約２．２ｍ、最大幅０．８５ｍとなり、天井石は絹雲母片岩（筑波石）３枚で構成されている。また、天井石１枚単位が非常に大きく、通常より分厚い。

・未盗掘の可能性があるが、土層断面の堆積状態により南側２枚の天井石を動かした形跡があり、追葬が行われたことが考えられる。

・No.１トレンチの土層堆積状態から、墳裾部分に円筒埴輪を樹立させ巡らせていたと考えられる。全周していたかどうかは、今後の調査によって明らかになると思われる。

・埴輪を有する前方後円墳で、墳頂部に箱式石棺を設ける古墳は印旛郡内ではまだ類例がない。また、この埋葬箇所と合わせ過年度の調査では、人物や馬などの形象埴輪の他に家などの器財埴輪と思われるものも出土している。これにより従来まで６世紀後半と考えられてきた道作１号墳は、６世紀中頃に築成された可能性が出てきた。さらに石棺の天井石も分厚いなど、被葬者はかなりの有力者であると思われる。